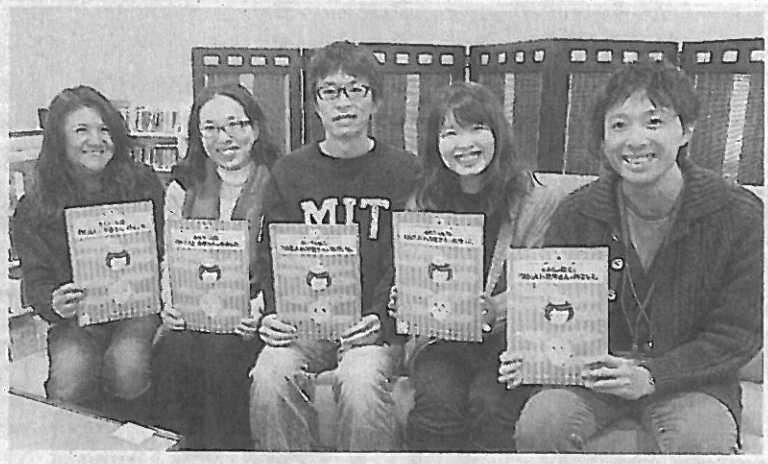
朝日新聞 第3種郵便物認可

外国人患者の壁なくそう

神戸のNPO 病院向け「医療通訳」冊子

阪神大震災の起きた17年前から外国人支援を続ける神戸市のNPO法人が、病院向けの「医療通訳」のハンドブックを作った。日本語がわからない外国人でも、安心して受診できる病院を増やせたら。そんな願いを形にした。



医療通訳ハンドブックを作った「多言語センターFACIL」のメンバー。一番左が吉富志津代さん＝神戸市長田区海運町3丁目

長田区の多言語センターFACIL（フランス語で「簡単な」の意）。言葉の壁のために支援の手が届きにくい、阪神大震災の外国人被災者を助けようと集まったボランティアを母体に1999年、発足。現在、28カ国語の通訳・翻訳者約600人が登録し、活動している。

「司法通訳は社会的に認知されてきたものの、医療通訳はまだまだ」と代表の吉富志津代さん(55)。外国人患者を敬遠しがちな医療機関に少しでも関心を持ってもらえたらと考えたのが、ハンドブック作成のきっかけだ。タイトルは「あなたの病院に『外国人』の患者さんが来ました」。

病院に言葉のわからない外国人がやって来た時、どうしたらよいか。例えば、患者の家族や知人に通訳を頼む。最も簡単、確実に見えるが、患者が傷つくのを恐れて本当のことをあえて伝えなかったり、語彙の少ない子どもが「子宮筋腫」を「子宮がん」と過って伝えたりするケースが現実に起きているという。

多言語センターは2005年から、県の助成金を得て神戸市内に5カ所ある協力病院に医療通訳を派遣する事業に取り組んできた。ハンドブックには、「15カ国語診療対訳表」など役に立つ対訳集や会話集、「多言語医療問診票」など便利なサイトの情報もつけた。

吉富さんは「少数者である外国人が安心して受診できる環境を作ることは、私たちのだれもが安心して医療サービスを受けられる環境づくりに必ずつながります」と話している。

ハンドブックは1冊200円で販売中。問い合わせは多言語センターFACIL（078・736・3040）へ。

（日比野容子）

来月3日、中央区でセミナー

多言語センターFACILと県国際交流協会の主催で3月3日午後2～5時、医療通訳を考えるセミナーが神戸市中央区脇浜海岸通1丁目の国際健康開発センターで開かれる。総合診療医で神戸夙川学院大教授の松尾信昭氏が「医療通訳とメディカルツーリズム」と題して講演。その後、参加者が、医療と観光を組み合わせたメディカルツーリズムの推進派と反対派の2グループに分かれて話し合う。

無料。前日までに①名前②連絡先③職業④所属機関・団体名⑤メディカルツーリズムに対する意見を記入し、多言語センターFACIL（ファクス078・737・3187、メールfacil@tcc117.org）へ申し込む。